

# 江戸時代の 花たち ②

書物に見る  
江戸時代の園芸文化

小笠原 亮



花の巻見開き  
ならびに鳥風月表紙

## 立華正道集

(雑花園文庫蔵)



鳥の巻見開き。行の立華、右はスイセン一式

室町時代に書院建築が完成され、床の間という室内空間に、壁面には絵画を掛け、その前面に飾卓を置き、香爐を中心に向かって左に活け花、右に燭台を置くなどの三具足飾り、あるいは活け花と燭台を対に置く五具足飾りなどの装飾形式が確立された。そうした形式のなかで活け花部分がより高度な技術を追求め、芸術的価値を高めて「華道」として一層発展し現代まで受け継がれ、今日では日本の華道芸術は世界の認めるところでもある。

今回紹介する「立華正道集」は、花鳥風月の各巻に分けられた4冊。表紙は朱色亀甲花紋空押（活出模様）和綴じ、元題簽完存、天和4（1684）年、池坊門弟、木屋權左衛門（号）尋旧子の編著、京都で出版された。内容は著者の序文に続いて1頁に1図の立華図が88図、砂之物図12図、分解図5頁手彩色。本文は総論に続き各論48カ条、付4条、後跋から成っている。

活け花の書物は、華道の参考文献のみならず、園芸的に見ても、当時観賞された植物の種類や、園芸品種。あるいは外来植物など多くの情報が含まれ興味深い。なお、序文は次のとおり。

### 立華正道集序

「智者は水を好み 仁者は山をこのむ 瓶に花さして常に見ること心も楽しむ業なれ 陶淵明はひとり菊を愛し 周茂叔が蓮を翫しも 実にさることぞかし 誠に寸水尺樹を以て江山千里の風景をうつし 四時の変化木草の出生都床間にあらはすのみ 粵故実の格式を具へて真草行の三体をわかり 其正しきを図して立華正道の一集となし侍る事然而已」

天和4年春芳節 尋旧子